

志賀直哉の手紙 (山崎斌宛)

田澤 基久 国語教育講座

新版の『志賀直哉全集』(以下、『全集』と略記する)第18巻(岩波書店、二〇〇〇・八)に収録されている山崎斌宛書簡が一通ある。まずそれを見ておきたい。『全集』には「封書、転載」とある。どこかの雑誌に発表されたものか。未確認。

1045 (昭和12年) 1月29日 山崎斌宛(東京赤坂区田町四ノ九)「封書、転載」

前略 御手紙拝見 例の木活字本大いに楽しみにして居ります。

八十枚より少し長くなりますが、次のやうな計画を作つて見ました。

真鶴——十四頁

雪の日——十五頁

小僧の神様——二十八頁

鶴——八頁

「矢島柳堂」といふのの一部ですが鶴といふ題でまとめたもの

城の崎にて——十七頁

菰野——三十三頁

一頁三百字として百二十五頁になります。

題は「映山紅」つゝ、じの事

短篇六つをつゝ、じの六花卉といふつもり、それから大分君の計画からはみ出す事かも知れませんが、最近私の手に入れた八大人山のつゝ、じの花の小品があり、今京都に表具にやつてあるのですが、これをうまく工夫してなるべく印刷らしくなく作つて口絵にしたいと思ひます。清澄な感じ、古径君非常に感心してゐたさうです。京都の紫峰君も感心してゐました。

短篇六篇はそのつもりで選んだわけではなく自分で好きなもので一つにまとめ、しつくりし、同時に単調たらぬものと思ひ、集めたのが以上の六篇で、

全体の題を考へる時六卉のつゝ、じの画を想ひついたので。「映山紅」は字引で探したもの。

三月九日母の法事で上京の折り尚精しく御相談したいと思ひます。

「ある女の生涯」読みました。君の意見に全然賛成です。感心しました。

早川さんはあれから暫くして帰りました。若山君は、昨日から名古屋へ行きました。

『映山紅』(草木屋出版部、昭十五歳)という単行本の原案が示されている。

(もとは右六篇が収められる予定であつたことがわかる。最終的には「小僧の神様」と「鶴」がはずされ、「百舌」と「山科の記憶」が収録されることになつた。)山崎がこの木活字による志賀の小説集を思いついたのはいつ頃であろう。

『全集』第14巻(二〇〇〇・三)所収の日記、昭和12年1月21日の項に次の記載がある。

ヒル頃山崎斌来て起きる。和紙、木活の本を作りたしといふ 承知する、木活大いに興味あり、

和紙、木活で凝つた造本印刷にしようというのが山崎の考えだつたようである。志賀はそれに乗るかたちで刊行を目指したと考へられる。

さらに1月22日の項にも『映山紅』書名決定の記述がある。

山崎の所から出す本「映山紅」といふ名に決める つゝ、じの事なり、短篇六つ故に六花卉のつゝ、じの意、八大人山の画を口絵にするつもり、

志賀は、「身辺記」(『文芸春秋』昭和12・4)に八大人山の絵と出会つた当初は(非常に感心し、景色の或る絵などはセザンヌと共通なところがあるなどと思

つた）。しかしその後（その仕事にマンネリズムがあるやうに段々思はれ）、あまり好まなくなつた。それが最近知人が持つて来た山人の絵を見て、（又改めて甚く感心して）しまい、二枚の絵を譲り受けた。それは（蓮の花を描いたものと、もう一枚は躑躅の花を描いたものだ）つた。草木屋版『映山紅』の口絵に使われることになつたのが後者である。

そして最初に引いた1月29日付の書簡となるわけである。以上から当初志賀はこの出版にかなり乗り気だつたことが観取される。

① 昭和12年2月1日

ハガキ ペン書

消印 奈良 12・2・1 后8―12

表 東京市赤坂区田町四ノ九

山崎斌様

二月一日

志賀直哉

裏

前略 □ありがたく拝受。それから木活ゲラ刷今日拝受。無理な註文かも知れませんが枷印宗（三字印）これらに較べるとすつきりしなと思ひました。八大人の画は大塚の巧芸画にして見ても面白いと思ひました。今度上京の折り画を持つていつて大塚とも相談してみようと思ひます。活字は子供がリノリウムに彫る時出る線、あ、いふ風にならぬやうに充分御注意必要かと思ひます。つまりほり出された線がほり残された線にならぬやう。

木活ゲラとあるのは見本であろうか。志賀が字体にかなりこだわっている様子がわかる。また、口絵にする八大人の画の印刷についても同様である。気に入つた本にしたいという気持だつたのである。（しかし志賀が参考にと挙げた宋版の凜とした字体に較べると草木屋版『映山紅』の木活の字体はいささか鈍重の感を否めないように思う。竹村真一は『明朝体の歴史』（思文閣出版、昭和61・7）の中で、宋版の特徴の一つとして（正しい文字を正確に表現して、常に端正な楷書）であることを挙げ、（宋版の書体は崩さず彫ることにありとある。）

② 昭和12年2月2日

封書 ペン書 原稿用紙一枚

消印 奈良 12・2・2 后0―4

表 東京市赤坂区田町四ノ九

山崎斌様

裏 奈良市上高畑

志賀直哉

二月二日

前略 折角乗気のところにかういふのは少し心苦しく思ひますが、昨日の木活よく見てみると どのでもないやになり 迷ひ出しました。彫る人頭はななくて、から 普通の意味でもつと刀のきれる職人の方がよかつたと思ひました。これでも或る面白味はあると思ひますが、木活の面白味とは似て非なるものと思ひました。もつと機械的な正確さがないと面白くありません。一字々々が少し行き当たりばつたりで、ゲテな感じが濃いと思ひます

木活は矢張り専門の職人でなければ本統のものは出来ないのだらうと思ひました。今時さういふ職人はゐないに違ひないから、結局僕が考へてゐるやうな木活は不可能なのかも知れません。一生懸命彫つてくれる人にケチをつけるやうでお気の毒ですが、僕は矢張り大きい鉛の活字にして貰ふ方がいいと思つてゐます。僕の為に字数を多く作ると困るので、早く此事おしらせします

二月二日

山崎 斌様

志賀直哉

前日のハガキに続いて木活への志賀なりのこだわりがあつたのである。気に入らない木活にするよりいっそ鉛の活字の方がいいと山崎の木活字本というくだわりに疑問をもっているのがわかる。ここに早くも全国書房版『映山紅』（全国書房、昭二十一・十二）が胚胎している。

③ 昭和12年2月6日

ハガキ 鉛筆書

消印 奈良 12・2・6 后4―8

表 東京市赤坂区田町四ノ九

山崎斌様

奈良市

志賀直哉

二月六日

裏

お手紙拝見 折角乗気になつたところだし木活が或る程度に満足出来る程度
でもになるやうだとこれに越した事はありません 不二木阿古 (名前印)
この判こは広小路の兎屋の主人が不二木君の為に誰れかに作らしてくれも
のの由、これを彫つた人なども頼む事が若し出来ればい、人と思ひます。兎
屋は僕もよく知つてゐる人故一度訊き合はせて見ては如何ですか。

自分の知りあいの中から気に入つた木活を刻る人間を探して来ようという気持
がまだ残っている。

④ 昭和12年2月6日

ハガキ 鉛筆書

消印 奈良 12・2・6 后4-8

表 東京市赤坂区田町四ノ九

山崎斌様

志賀

裏

前便の判は金沢文庫宋版文字に仿ふとしてあります。刻つた人は蔚堂といふ
人、宋版でも変なクセなく此文字位が形がい、やうに思ひます。金沢文庫宋
版といふのを調べ見本にされるとい、やうに思ひます。

自分が好む宋版の字体を山崎に示している。

⑤ 昭和12年2月12日

封書 ペン書

消印 奈良 12・2・12 □4-8

表 東京市赤坂区田町四ノ九

山崎斌様

裏 二月十二日

奈良市上高畑

志賀直哉

〔謹啓〕

御寒うございます 御無沙汰いたしてゐて申訳ございません さて今日赤坂
の草木屋の山崎さんより御電話にて不二木さんの版のことについて御訊ねが
ございましたが、あれを刻つてくれました村田蔚堂さんは二三年前他界せ
られてその版下の出所を御たづねいたすようですがございません 左様に山崎
さんの方へも御返事申上げました あといろいろと考へましてこれも二年程
まへになくなりましたが御返事申上げました 堀碧堂さんといふ人に二三度宋版だちのもの
を作つて貰つたことがあつたのでその遺族さんの処にさうした参考書が残つ
てはるはしまいかと先程行つて参りました処が端本でございましたが西冷印
社版で印学叢書の廣印人傳といふのがございました 今一般に用ひられてゐ
る宋版の活字とは違つて古風な大間な風格のある字でどういふ風にお用ひや
らわかりませんが宋版だちのものをお作りになるとすれば 充分に御参考な
るものと存じます 若し御覧になるとすれば拝借して来ました故一度そちら
へ御送り申上げてよろしいと考へます 一応御覧になつてそして山崎さんと
御相談なさるとしてしかし新規にあれを活字に刻らされることは中々大変な
為事と想像いたします とにかく一応御参考までに右迄申上げます 拝呈
二月十日

〔谷口喜作〕

志賀直哉様

〔以下、谷口書簡の末尾に書き込み〕

兎に角その本を谷口君に送つて貰ひ一見の上考へようと思ひます。道楽の為
め余り大きい犠牲を払ふ事は考へものですが、散文といふものの性質がさう
いふ道楽の為め、よくなるものでないから、矢張りソロバンに当つて余り馬
鹿々々しければ普通の活字にされる方がい、と思ひます。尤もい、職人あつ
て、さう法外な贅沢にならぬやうなら面白いと思ひますが、その辺よく考へ
て、やりたいと思ひます。本は一見の上君の方へ御廻送致します

二月十二日 志賀直哉

山崎斌様

谷口喜作という人はやはり木版印刷に関わる人か。志賀は自ら問い合わせる程木活にこだわっていたのであろう。しかし一方で、山崎の凝り様を道楽と言いい、採算がとれないような出版なら鉛の活字で刊行した方がよいと直言している。

⑥ 昭和12年5月14日

ハガキ 鉛筆書

消印 奈良 12・5・14 后 8―□

表 東京市赤坂区田町

草木屋

山崎斌様

奈良市上高畑

志賀直哉

十四日

裏

前略 八大人大変よく出来たので喜んでゐます そのうち原稿セイ理して

お送りします。八大人の木版画十枚程別に御注文願ひます

早々

当初からあつた八大人人のつつじの画は草木屋版『映山紅』の口絵に使われることとなる。

⑦ 昭和12年7月20日

封書 ペン書 原稿用紙一枚

消印 奈□□□ □・□・20 □□―8

奈良高畑 12・7・□ 后 4―8

書留

表 東京市赤坂区田町四の九

草木屋

山崎斌様

裏 奈良市上高畑

志賀直哉

七月二十日

御無沙汰して居ります。「早春詩抄」頂きながらつい御礼遅れ失礼致しました。僕には今度の物の方が美しく思はれました。

木版画十枚及び原画今日拝受 木版画ありがたく、厚く御礼申上げます。

同封「映山紅」と名前は却々苦心の作にて、東大寺図書館より北宋版の経本

をかり 写真で、加納君が拵へた苦心の作で、これから先は大きさその他御

任かせますからよろしくお願ひ致します。

内容の原稿はそのうち御送りします。

(近々に) 御礼早々

七月二十日

志賀直哉

山崎 斌様

こうした経緯の後、草木屋版『映山紅』が刊行されるのは昭和十五年末、出版の話が出てからおよそ三年の後のことであつた。完成品が届いたのは昭和十六年一月一日。日記には一行次の記載がある。

山崎（映山紅）を持つて来る

⑧ 昭和12年10月22日

ハガキ ペン書

消印 奈良 12・10・22 后 8―12

表 東京市赤坂区田町四ノ九

山崎斌様

二十二日

志賀直哉

裏

お変わりない事と思ひます。

「二茶」ありがたく拝受、自分の全集の校正などに追はれ原稿お送り出来ず

にゐます 何卒不悪、近く送り致します。此十四日家内と子供四人淀橋区諏

訪町二二六（デン牛込九九）へ引きうつり、今は此方の女学校にある娘二人

とゐます。そして来春私達も前の場所に移るつもりでゐます。

御礼 早々

⑨ 昭和13年2月10日

ハガキ ペン書

消印 奈良 13・2・10 后4―8

表 東京市赤坂区田町四ノ九

草木屋

山崎斌様

志賀直哉

二月十日

裏

又々大変遅れ失礼。校正に追はれ手がつかずそのまゝになりましたが、昨日校正漸く済んだので一寸休んでからその方に掛かります。真鶴。城崎にて。雪の日。百舌。山科の記憶。(小僧の神様はやめてこれに更へます) 菰野。以上の順序で入れようと思ひます。「城崎」だけは直しました。字を直したので真赤になりました。あとも叮嚀に充分に直したいと思つてゐます。いつまでもぐづぐづしてゐて申訳ありません不悪。

り。 百部限定本として出版された草木屋版『映山紅』に収録された作品は以下の通り。

真鶴 大正九年作

城崎にて 大正六年作

百舌 大正十四年作

雪の日 大正九年作

山科の記憶 大正十四年作

菰野 大正九年作

奥付には刊行に関わった人の名前が掲げられている。

監修・装幀 山崎斌

活字工作 石坂憲一・丹羽兼弘

挿絵工作 田口喜久松

用紙制作 佐藤善一郎

表布制作 山崎敏子

印刷 小澤仁三郎

製本 斎藤半次郎

事務 山崎和泉

〔「城崎」だけは直しました〕とある本文の異同については寺杣雅人氏の「志賀直哉「城崎にて」の最終稿——『映山紅』所収「城崎にて」の本文と注解——」(尾道大学芸術文化学部紀要(11)二〇一一)に詳細が検討されている。その中で氏は〔「城崎にて」の「もつとも信頼するべき本文(テキスト)」の定本とすべきは、この「城崎にて」を措いてほかにあるまい。定本「城の崎にて」は明らかな誤りなどを除き、全国書房版『映山紅』所収「城崎にて」をもとに作成されるべきである〕としているが、最終稿が最良のテキストであるかどうかという問題は残るように思われる。

草木屋版『映山紅』は戦後になって全国書房から再刊されることになる。初刊の時とくらべて志賀の意識は変化している。昭和21年8月4日の池田小菊宛書簡(『全集』第19巻、二〇〇〇・九)に次の記載がある。

1733

(略)「映山紅」の方は私の希望は前の「映山紅」と全然離れた別の本にして貰ひたく、あの本を真似てもあの本だけの本を作るわけには行きさうもありませんし、私としてはそれ以下の似た本が出来ても少しも楽しくなく、又一方からいへば山崎君の出した本をそのまま真似する事、全国書房としても不見識なわけですし、同じ内容のものを全然別な構想で作つて見る方遙かに私としても楽しみです、

あんな大きな本でなく、(あの本は贅沢ではあるが下手趣味のものですから)今度は反対に上品な小さい本を作つては如何かと思ひます、

八大人人の画はなくなつてゐるので紫峰君に矢張ツ、ジ(映山紅)の画を描いて貰ふ事、此間頼んで置きましたから、用紙その他の事紫峰に相談して見るといいとも思ひます、兎に角前の「映山紅」に惹かれぬやうにしたいと思ひます、総て不如意な時代に殊更贅沢なものを作り読者に迷惑かける事なるべく避けたく、此事田中さんによくお話し願ひます、いい本をつくるのはいいが、程度を越へて贅沢にならぬやう願ひます、

「矢島柳堂」二万七八千部のこと、それで十二分です、

金は今のところ、ありますから、急ぎません、斎藤書店の「剃刀」も町に出たさうで、此方の金も恐らく近く入る事と思ひますから、急ぎません、新「映山紅」の装幀に就いては考へて見ます、旧「映山紅」と全く別なもの考へて見ます、

東京へ帰つて矢張り何かと忙しくなり、会ひたくない訪問客など続いた日には疲れて了ひます、

今度の奈良は私には大変いい一ト月半で、奈良での静かな気分出来るだけ
持続したいと思つてゐます、早々

初刊の趣味的傾向をこの時点ではかなり嫌っている。
また昭和21年7月21日の志賀康子宛書簡（『全集』第19巻、二〇〇〇・九）に
は次のような記述がある。

1723 全国書房の本紫峰君に装幀を頼み、「映山紅」場合によつては紫峰君の挿画
で全国書房から出す事にするかも知れず、それで本屋にその本を一見したい
と云ひ出したので、自家保存の分を送るやうにいつたが、紫峰君に贈つたの
があつたので、それで間に合つたから送らないで丁度よかつたのだ、

志賀は全国書房版『映山紅』の装幀を榊原紫峰に頼みたかつたようだが、それ
は実現しなかつたらしく同書に装幀者の記載はない。また出来るだけ草木屋版か
ら離れたかつたようで、本文木活字かたや金活（印刷は京都の似玉堂代表鈴木
直樹）と異なつていたり、判型も違つていたりする（前者は四六倍版、後者は菊
変型版）ものの、一方では和本様仕立夫婦箱であること、箱及び本体題簽が草木
屋版のものになつてゐること、本文用紙が耳つき和紙であることなど草木屋版を
模してゐると言える。果たして志賀が満足できるものとなつたかどうか、判らな
い。

『映山紅』関連の書簡は以上だが、ほか二通の山崎宛ハガキがある。

⑩ 大正10年11月20日
ハガキ ペン書
消印 千葉・□□ 10・11・□
表 東京市神田区錦町三ノ二〇
裏 山崎斌様

「二年間」頂きました。御好意ありがたく思ひました。今忙しい時でそれを
したら拝見したいと楽しみにして居ります。御礼のみ早々

我孫子町

志賀直哉

十一月二十日

⑪ ハガキ ペン書

消印 奈□ □・□・□5 □214

表 伊豆土肥温泉御殿

竹青村荘

山崎斌様

裏（印刷）

謹賀新年

元旦

奈良市幸町

志賀直哉

差出年月日不明。以下の推定資料がある。

大正11年3月5日『朝日新聞』「学芸だより」

○山崎斌伊豆土肥温泉土肥旅館にて病氣療養中

大正11年3月5日『読売新聞』「よみうり抄」

▲山崎斌氏 伊豆土肥温泉に滞在中

大正14年8月2日『読売新聞』

山崎斌「私を語る」末尾（伊豆土肥温泉中宿にて）

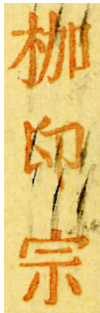
大正14年8月27日『読売新聞』「よみうり抄」

▲山崎斌氏 伊豆土肥へ帰つた

大正14年8月28日『朝日新聞』「学芸だより」

▼山崎斌氏 信州方面を旅行中のところ伊豆土肥温泉に帰つた

注1



注2



（平成25年9月30日受理）